

世界に挑戦する画家

出村 幸代

Sachiyo Demura

愛染赤 (freeze to red)

90.9 x 116.7 cm
油彩 キャンバス / 2014



家

庭科の教師として夜間の定時制の学校で教鞭を執っていた出村は、趣味として絵を描き始めた。「ストレス発散だった」と、彼女は当時を振り返る。絵を描くことが、教員、そして主婦として働く原動力だったようだ。自由に描きたいように描いていた当時の作品は、人物の顔を緑で塗るなど、今振り返ってみると挑戦的な絵だったようだ。そんな出村の画業は、1998年に働きながら奈良教育大学で美術教員の免許を取得したことにより、より一層本格的になっていく。

出村はこれまでの画家人生で何度も個展を開催したり、グループ展に参加したりしながら作品を発表し続けてきた。作品が貯まってきたので個展でも開こうかと考えることはない。彼女にとって発表の場とは、描き続けるためのツールのひとつ。つまり、個展やグループ展の計画を立てることで、描かなければならない状況

作り出し、「怠け心をコントロールする」のだ。そう笑いながら語る出村の予定は、数年先まで決まっている。発表の合間には、勉強会に参加して仲間たちと刺激し合いながら、自身の腕を磨く。初めて個展に挑戦したのは1987年だった。実はこの展覧会、絵を辞めようと思って記念に開催したものだったという。しかし、作品を気に入る人が現れ、何点か売れた。「作品を観ても、十人十色の感想がある。自分の絵を良いと思ってくれる人が1人でもいれば嬉しい」と、自身の作品を評価してくれる人がいたことを改めて知り、出村は引き続き絵を描くことを決意した。すぐさま3年後に同じ画廊で個展を開く予定を立て、それから3、4年に一度のペースで作品を発表し続けているのだ。

現在彼女が取り組んでいるのは色彩の追究。これまでも何度かこのテーマに挑んでいるが、その時々年齢や気



所狭しと置かれたキャンバス。絵画仲間も彼女のアトリエに集い制作することもある。